

大正十四年八月十三日  
第三種郵便物認可  
昭和六年三月十二日發行  
昭和六年二月二十日發行  
（毎月一回十二日發行）第十卷第三號

# 眞生

第十卷 第三號

□今日の多くの社會を見るに、殆どあらゆる方面に於て行き詰つた感じがします。乍然それにもかゝはらず、多くの人が之をさうしたらよいかと云ふことに眞剣の人の少ないことは一体さうしたわけです。

□それは事件があまりに大きい爲めに、個人一人の力ではさうすることもできないと云ふのだらうか。それとも個人としてはそれを直接に感じ得ないのであらうか。

□それにしても、今日の社會を今のまゝにして、放任して置くならばそれこそあとでは取り返しのつかないやうなはめにはならぬが、少くとも今日の現状を靜に眺むるとき、私には社會衰滅の不安さへ感ぜられてならないのです。

□或は政黨の墮落、政治の腐敗、經濟の行き詰りや、思想の衝突、殆どあらゆる方面に不安と動遙が感ぜらる。之は今のところ一國一家の問題ではないやうです。

□而もその原因がどこから來るか、それは多くの場合、私利と私慾との上から來る。言かへれば個人主義的利己主義から來るのです。乍然世の中はその爲めに反つて倒れつゝあるではないでせうか。

□然は之を鎮むるには何か一番大切であらうか、それは言ふまでもなく私利と私慾との絶滅にある。言換れば公利公慾の生活であります。自利と利他との生活です。

□佛敎では之を全一の生活と云ふ。全体が一としての生活であります。自他の區別を絶した共存共榮の方策であります。言換へれば一切の私利と私慾とを放擲して、すべてを全体の上から割出すことです。

(念)

## 實現世界の肯定と否定

### 目次

此の「一人」	魁
現實世界の 否定と肯定	魁
宗教と道德	土屋親道
宗教と經濟	土屋親道
昨今の生活	安田恢順
吾朋便り	

### 此の「一人」

御氣嫌をされば取る程、人には嫌はれる、人から蔑まれ、輕ぜられる。人を手段で引廻さうとしたら、人は動くものでない。鈍物でも思直でもないから、自分の全力を盡して、誠をこめ、脇見をせずして、齋ぐらに進入で行けば、人はその「眞剣さ」に打たれて動く。動かそうとして動くものでなく、自分が「動いた」時、人も動く。だから先づ自分が本當に動き出さなければ駄目だ。

人を使はうとしたら、人は動くものでない、人にやらせようなんと思はずに、總てを自分の事だとし、自分一人で作るつもりになつたら人も皆自分と同じ氣になつて動いて呉れる。

その時には、自分だとか、他人だとかいふ區分がなく、たゞおしなべて、一つの大きい「一人」があるだけだ。

家庭も此の「一人」にならねばいかぬ、工場も商店も學校も教團も此の「一人」にならねばいかぬ。

此の「一人」になつて働く時、皆が頭になつても手足になつても、其儘寄り集つて「一人」の人間になるのだから、不平なく高慢なく、黙々として自分の持場を果たす。

皆が、大きくなつて此の「一人」にならねばいかぬ。

皆が、統一して此の「一人」の中に溶解せれば駄目だ。

佛とは、此統一した大きい人格を云ふのです。皆して一人の大きい如來さまを造つて行かればいかぬ、釋尊はこれを「和合僧」と謂はれました。

和合僧はこれ難陀尊、難陀尊はこれ佛兩足尊として、兩足で以て歩いて歩かれる、佛を足なしの極樂の置物だと思つたら間違ふ。

皆が家に、繪像や木像を祀るだけでなく、家全体が活きた「み佛」になつて歩き出せるようになりませう。(魁)

□人の心ほゞ妙なものはない、或る時は此の世がいやになつたり、又或る時は非常に此の世が好きになる。

□従つて、此の世が時には非常に肯定されるかと思ふときは非常に否定されるきもある。之は一体何故であらうか。

□此の世がいやなら、すべてがいやかと考へて見ると、必ずしもさうでない、そこには捨て難いところがある。

□それなら、此の世がきこまでもよいかと云ふに時によつては必ずしもさうでない、ときにはもうよい加減で早く引き上げた方がよいと思はれることさへある。

□して見ると此の世を厭ふ人々には此の世のよいところの方面に全く望を失つた人であり、此の世を喜ぶ人々には此の世のいやな方面を全く見失つた人かも知れない。

□然し此の世のよいところと云つても、それをきこまでも見つめて行けばやがてはそれだけではあき足らぬ何ものがと現はれて来る。

□さうかと思へば此の世のいやな方面のみをつきつめて行けばやはりそればかりでもなさそうな世界が此の世にもまだありさうに思つてならぬ。

□之は私共の生活に於て、此の穢土と淨土の二つの方面が現在するからではあるまいか。

□そして此の二つの間から、常に私共の生くべき道を本當に切り開いて行くことが人生の望みであり、喜びである。(一九三二、一、三二、夜)



# 宗教と道徳

(宗教座談)

土屋 觀 道

## 一、宗教と道徳

○「宗教を信じててもそれが實際生活に何等の効果がなないと云ふのでは宗教の社會的價値と云ふものはないことになりませんか。現に私の知つてゐる人にもそんな人が多いので、私があなたの信仰運動に入る氣になれなかつたのであります。」

□「さう云はるれば私には一言の申し開きもありません。現に私自身の信仰にも、未だ不完全な點も多いし、又私自身の行いにも自らあき足らぬ點が多いからであります。乍然それだからと云つて、今の信仰を捨て、昔のやうな無宗教時代にもなれないのです。何となればそれでも尙無信仰時代より今日の方が數等ましであるからであります。否、それどころか信仰を持つてゐてさへも之位の私です。ですから信仰がなかつたらどうなることせう。今の私には信仰うすきものではあります。信仰なくては生きれない私です。尤も信仰に入る位だから、信仰に入つたなら今までよりも一層立派な人格ともなり、更に意義ある人となりうると云ふ心もあります。乍然、それだからと云つて信仰に入れば直に立派な人格になりうるとは思つてゐません。尤ももの見方では立派な人格となつたとも云へば云へないことありませんが、さう云ふ議論よりも實際生活に於て、自分の生活が完全な

生活でないからであります。」

○「乍然宗教を信じててもその人の生活が變らないと云ふのでは宗教を信じたかいないではありませんか。」

□「それは變らぬと云ふのではありません。少くとも私の信するところでは信仰に入つた以前と以後とでは全く其の人の人格が一變すると思ふのです。だからトルストイも「宗教はその人に於ける人が少しも變らないと云ふことはいないのであります。従つて之を信じた人から云へばもとよりその人の人格」然し私の知つた人では現に信仰に入つたと云ふ人で、少しも人格が革まらない人があります。それどころか、信仰に入つたと云ふので反つてウヌボレンが強くなり、急がしい中にも念佛ばかり申して一向仕事に熱心しないやうな人をさへ見るのです。それでも信仰はよいものでせうか。」

## 二、宗教の本質

□「必ずしもそれでよいと云ふのではありません。乍然道徳的に許さぬところを宗教では許すことがあります。否、宗教としてもそれを許せぬのが本當であります。けれども、私共が之を理想し、之を實現しやうとしても、自分に力のない爲めにそれが實現できないとき、それをも救はうとするのが宗教であります。之は人のことではなくして、自分にさうした實力のない自己を發見したとき、初めて此の宗教の妙諦が知れるのであります。それは決して私共の生活が道徳的でなくともよいと云ふのではありません。人生の究極を極むれば人生の眞意義は道徳的生活より外にないのであります。乍然、いかにつとめても自分の實力のない爲めに、望みのみ高くして實行が伴はぬのをいかにともすることが出来ないのです。中には自分の人格が卑ひからだと批難する人もあります。然しそれ

に違ひはないのですが、それだからと云つて其の人格を急に高めることのできないものにはいかんとも仕やうがないのです。中には自分の自覺が足りないからだ云ふ人もあります。それも亦それに相違はありません。乍然それにしてもそれ以上の自覺ある力が出ないのをどうすることもできません。」

○「それにしても、宗教に入つたから、道徳は無視してもよいと云ふものではありますまい。」

□「それは云ふまでもないことです。いづれの宗教と雖も未だ道徳を無視してよいと云ふことを聞いたことはありません。宗教を信する位なれば自己の守るべき道徳も一層守るのが本當であります。」

○「乍然親鸞上人が善人なほ生るいかに況んや悪人をやと云つてゐるではありませんか。その他悪人正機と云ふやうなことも全く善を無視し、惡を讚嘆したやうなやり方です。尙『惡以つて恐るゝに足らず念佛を妨ぐる惡なきが故に』とか『善以つてたのむに足らず念佛に勝る善なきが故に』と云ふ如き全く道徳を無視したやり方でせう。」

□「たゞそれだけ聞けば全くそれは悪いやうに聞えます。乍然それがいかなる意味に叫ばれたかをよく注意して之を味ふとき、反つて普通の道徳を越えたる宗教の救いがあらはれて居ります。それは前にも申したやうに私共の道徳的生活が行き詰つて自分の力ではいかんともすることのできないとき初めて此の言葉が私共を永久に救つてくれるのです。」

○「それはまた何故でせう。」

□「それより外に私共の救はるべき途がないからです。何となればその他に爲しうべき道があるものを爲さずしてそれを云ふならば色々のそしりもありませう。けれども、その外に何の爲すべきすべもつきはてた者には如來の御救いを仰ぐ外ないではありませんか。そしてそれがまた本當に本當の道徳が復活する所以でもあります。」

### 三、宗教の役目

□「そしてまた、そこに宗教の役目もあります。之を宗教の救済と云い、淨土門に於ける念佛の意義がそこに初めてあるのであります。その意味から云へば今までの聖道門が自力的に行詰つたところを救つたのが淨土門と云へるのであつて、淨土門の淨土門たる所以であります。此の意味を知らずして、徒に淨土教を罵ることは誤りであります。他力門と雖も決して道徳を無視したものではありません。少しでも自らに爲しうべき力がありながら、之を爲さずして淨土教を信するが故に之を爲さずともよいと云ふやうな考へがあるならばそれこそ、淨土教を罵ることも一理あります。凡そ此の世に於て誰か我こそは完全者である、あらゆる爲すべきことすべてを爲せるものと云いうる人があります。」

○「恐く、うぬぼれでない限り到底云へぬことです。」

□「然ばそのあり得ないところを私共はどうして乗り越えやうとするのです。」

○「それはたゞ全身を込めて努力する外ありません。」

○「乍然自分の力が足らずして、いかに努力しても効果のないものはどうします。自己の努力よりもより以上に自らの行爲が悪い方に走しつて之を止むることのできない時はどうします。」

□「果してそれができないでせうか。若し無いとするならば此の世に救いの宗教はいりません。そして、淨土教の必要もないことになります。果して此の世は一切が自力で行くものでせうか。若しそれで行くならば此の世は全く道徳のみでよいと云ふことにもなりません。乍然少くとも私の生活に於て今はまだ如來の救を信せずには居れぬのであります。それは私の行いが私の理想する生活として堪

えうることができぬからであります。」

○「それはあなたの理想があまりにも高すぎるからではありませんか。」

□「或はさうかも知れません。乍然人生の望みに於て、自分の理想を高すぎると云つて之を低めることができませんか、私の生活には理想と現實があるのであります。而も自分の理想は現實より高いのが常であります、その中でも最高の理想を望むのが本當でせう。最高の理想とは所謂完全の人格であります。佛教で云へば佛陀の生活であります。」

#### 四、人の理想と佛陀の生活

□「然ば人の理想と佛陀の生活とは一であります。所謂人の理想と佛陀の生活とは別なものではありません。従つて佛陀の生活とは所謂私共の完全生活であると云ふことになりません。然ば私の生活はその理想が高すぎるからと云つて、之が本當の私共の生活でなくてはならぬと思はれる佛陀の生活を止めて、それよりも低い生活で永久に満足して居られるものでありませうか。かくの如きは到底私共の堪え得ないことであります。凡そ私共の罪にして何が罪かと申しても、自らに爲すべきことを爲さず、爲すべからざることをのみ爲す生活ほど愚かにも亦罪深いものはありません。乍然それにもかゝはらず、自分の力が足りないで實力之に伴はず、いかに爲さうとしても之を爲すことができないで、反つて爲すべからざることのみが自らに爲されるべきとき、果して人生としての生き涯いがあるでせうか。人としてこれほど大きな悩みはありません。それも人として人生の望みもなく、理想のない間は止むを得ませんが、一度人生の理想が佛陀の生活であり、神の生活であると本當に氣付いたものが、自ら之に達せんとして達し得ないほど強い悲しみはありません。親鸞上人や法然上人が自らを罪深しとして歎かれたのは此のためであります。凡そ罪として罪の歎きの深刻なるもの

は之より大なるものはありません。正に永劫絶望の歎きであります。それも自らの努力によつてそれが幾分でも少くなり、その爲めにいつかはそれが悉くなくなるとでも云ふならば、それも後日の樂しみとして努力するかひもありませんか。あまりにも自分の行いのあさましくて到底生き涯いもないときに、之ほど大なる絶望はありません。而も此の絶望を深くしめしてかねてから、それを救ふべく私共の前に其の大悲を展開せられたのが實に大無量壽經に現はれ給ふた阿彌陀佛であります。而て念佛は正に之等の人々の爲めに如來から賜はる唯一の救いであります。言かへれば自分の力では已に生きて行くことのできない多くの衆生をば念佛の一行で之を救はうと云ふのが如來の本願であります。此の意味に於て、念佛は正に人生の最後の救済の道であります。」

(一九三二・三・二六)

### 佛教より 見たる 宗教と經濟 (二) 土 屋 觀 道

#### 四、所謂産業の合理化

其の結果が所謂産業の合理化と云ふものであります。さうしたら損失なくして營業して行くことができるか、營業の組織をさうしたらよいか、生産費を少して多額の生産をなすの方法はないか。かうした結果が即ち産業の合理であります。然に今日の社會組織は全く資本主義的社會組織のもとに一切が行はれて居るのでありますから

所謂産業の合理化と云ふことも其の立場からのみ考へるものが所謂資本家側からの産業の合理化であります。そこには改良品を濫利で廣く多く賣ると云ふやり方もありませう、中には悪い品でもよく見せかけて其の中に利益を獨占しやうとするやり方もあるかも知れません。其の他あらゆる方策に於て營利の智慧をしぼることは云ふまでもありません。乍然根が個人主義的自由競争の立場に置かれた今日の資本制度でありますから、さうしても力の

弱いのが強いものに負けると云ふのが今日の實際であります。其の力は所謂組織の力即ち延いては資本の力と云ふことになりませんが、さうしても大資本には小資本は勝てないと云ふことになりません。それはかうした産業の組織化は大資本によればなるほごあらゆる生産販賣の入費を少くして之を他より易く廣く賣ることが出来るからであります。其の結果はあらゆる方面に於ける商工業者の營業競争であります。一方小中商工業者の競争倒れを來たすのも多くはそれによるのであります。

而して又一方には大資本主義工業の發達は所謂機械工業の異常なる發達となり、従つて労働者の必要も今までのやうには入らなくなつて來るのであります。それと同時に今日の過剩に於て其の生産を差控へ、之に要する人件費をばよくことは所謂労働者の解雇と云ふことになりません。資本家の立場としては背に腹は代へられず、之も亦止むないことではあります。それによつて首切られる労働者の側から云へば之は甚だ恐ろしいつらいことではないのであります。従つてそこに多くの失業者や就職難も愈續出するのであります。又食ふにさへ困る位だから其の結果一般民衆の購買力が無くなることと云ふことは勿論それがまた大中小の商人階級にも影響し、商業不振の結果は更に

生産者側に影響して來ることも明であり、それが再び生産過剩となり労働者の再整理と云ふことになつて、問題はぐる／＼廻りて不況に陥つて行くのみでありませう。それでも人間は食はねばならぬ、喰ふに食なく、働に仕事がないとき人心の將來は正に恐るべきものがあるのであります。これ私共が大に識者の一考をわづらはす所でありまして、實に國家的重大問題であります。而も之は單なる法律や警察の力で取締ると云ふことは到底でき得べきことではないのであります。

然ば、之に對する識者の對策は何であります。恐くは「大に産業を興せ、殖民地を開拓せよ、而し民衆に其の業を興へよ」と云ふのでありませう。それは大によいこととす、乍然その産業とはいかなる産業であり、而し其の殖民地とはいかなる方面への殖民地でありませう。未だ私共はそれに對する具體的問題を聞かぬのであります。よしんばそれを聞くにしましても、それは單なる一時的のものであつて、恐く永遠の解決問題ではないのでせう。何となれば今日の不景氣は産業不足の爲めの不景氣ではなくして、産業過剩の爲めの不景氣である限り、さうした問題では解決するものでないからであります。

今日の不景氣を生産の過剩と云ふ、乍然それはたゞ之を資本主義的から見たのみの生産過剩であつて、國民全

体、若くは世界人類の生活の上から見たとき、果してそれらの物資が生産過剩で困ると云ふものであらうか、それは寸毫もその事實がないのであります。否それどころかそれは民衆一般の喜ぶところ、少しも困るものとはないのであります。而かもそれにもかゝはらず、一方ではそれが出來すぎて困ると云ふほごに其の品物が多額に存任するにかゝはらず、それを衣食することのできない民衆が天下に充ち滿つて全く生活難に困じはてゝゐるのが今日の有様であります。

#### 四、所謂社會主義

人は色々と理窟を云ふけれど、愈食へぬと云ふことになればこんなこととしてども食はふとするのが人間ではないでせうか。そこには倫理も道德も無視しやうとする傾きがあります。

此の意味に於て資本家が相互に協調を説き乍らも愈々自ら立ち行かぬとなるとそれを打ち破り、資本家同士が競争しあくまで自らを立たうとするのは又止むを得ぬこととあります。而てその結果が又一面には産業の合理化として労働者の整理ともなるのであります。之また無理からぬこととあります。乍然それと同時に之を労働者となつた方から考へたら、之等の人々が自らの生存の爲

めに之に對するあらゆる方策を構じて其の失業を防がうとすることは必ずしも悪いとばかりは云へぬ場合もあるかと思ふのであります。

ところで今日の經濟問題は主として産業の生産と分配とに關する問題であります。今日の社會問題は主として其の生産によつて得益の分配をいかにするかと云ふことが其の論題の中心となつて居るのであります。

之を資本家側から申せば今日の労働者がそんなことまで考へるのは越權である。それは資本家の自由に任すればよい、労働者はたゞ自分の雇はれた仕事に忠實であればよい、その爲めに毎日の賃金を拂つてゐるのではないか、それが氣に入らねばよろしく自らその職を止むればよいではないか。尙労働者は資本家の方で必要に應じて之を雇つたに過ぎない。だからそれがいらなくなつたなら之を解雇するのはあたりまへではないか、自分の爲めになるやうにこそ労働者を雇ふのであるものを自ら損してまで之を雇つて置かねばならぬと云ふ理由がどこにあるかと云ふのであります。そして之は資本家側から云へば全く無理もないこととあります。乍然それだからと云つて今日のやうな不景氣で失業者が續出し、就職難が勃興して民衆の生活まで困窮して來る場合、之を社會一般から見たとき、或は之を國家全体からして見たとき今日

のまゝで捨て置いてよいかは重大なる問題であります。之に對して社會主義者は何と云つてゐるか、人間がお互に働く限り、各自その働きに應じて其の利益を受けると云ふことが正しいではないか、然に若しこゝに一人の男があつて、多くの人々によつて共同に生産せられたものゝ分配を他のものより以上に獨占したものがあつて、それを知つたら、それでも多くの人は之に對して黙つてゐるであらうか。そしてまた黙つて居るべきであらうか。それは個人的にも社會的にも黙つて居るべきでもなく又黙つて居らるべきでもないではないか。それが吾々が今日の資本主義者に對する態度であると云ふのであります。

こゝに於て、労働者側の考へでは労働したものによつての生産の利潤は労働者によつてのみ配分するのが正常であると云ふのであります。然に今日の社會状態は全くそれが正當に行はれてゐない、そしてそれを私に横斷してゐるのは全く資本家の專横による。だから吾人は此の資本主義制度を否定して、社會主義の制度にしなくてはならぬと云ふのであります。それには今日の社會制度を變へねばならぬ、それにするには先づ今日の政府民衆のものたらしめ民衆の力によつて此の民衆の爲めの政治でなくてはならぬと云ふのであります。それにはこゝまで戦いである、戦いの外に之を實現すべき方法はない、

到底今日の資本家が單なる教育や宗教で民衆の爲めになるやうな心になることはないのだから、吾々はそんなものについてまでも頼つてゐてはいけなない。それはこゝまでも之等に向ふに廻して自らの力で之を戦い取るには如かないと云ふのであります。

#### 五、佛教の立場

然らば佛教よりして之をどう見るか、それは二者共に相入れぬ思想であります。何となれば二者共に單なる經濟の問題に始終して來た本當の人生問題に觸れてゐないからであります。

加之、私共の考へでは今日の資本主義制度がいかに云ふこゝもよく考へられるのであります、それかと云つて、今日の社會に於て、今急に社會主義が行はれやうとも思へないからであります。否、たとゞ一步を譲つてそれが行はれるとしましても、それはたゞ主として經濟問題に限られたものであつて、經濟以上の多くの社會問題に對して何等の解決も持たないからであります。

尤も單なる經濟問題として見れば今日の資本主義制度より社會主義制度の方が多分に多くのよい點を持つてゐます。それは今日の資本主義制度の欠点や行き詰りに對して多くの改造点を持つからであります。乍然それだから云つて、今日の社會文明の程度に於て果して彼等の云ふやうな社會主義制度が完全に行はれるものでありませうか、未だ民衆の自覺は決してそこまでは至つてゐないと思ふのであります。此の意味に於て況んや非合法的社會革命の如きは全く國体の尊嚴を損け民衆の幸福を妨ぐるこゝ之に越したものはないかと思ふのであります。

然らば今日の場合、之を今のまゝにして置いてよいのであらうか、それでは益々此の世は亂るゝのみではなからうか、靜に思へば悲惨の極みであります。尤も世はなるやうにしかならぬと云ふこともあり、闘いは力あるものゝ勝利となり、其の人たちの世の中となると云ふことは何れの時代にもあてはまることではあります、所謂強者の勝利が必ずしも正義の勝利でない限り、暴民の政治

が必ずしも民衆の幸福ではないのであります。否それどころが今日の文化程度に於て所謂労働者の獨裁政治の如きは全く民衆の敵であります。

かと云つて今日の場合、今までのやうな社會制度では勞資共に行き詰りであることも明かなことでありませれば更に社會の制度を社會民衆全体の幸福を中心として之を割出すと云ふことが最も進んだやり方と云はねばならぬと思ふのであります。それには政治經濟の問題をして今少しく人間本位のものとして、國家全体、社會全体の向上發展の社會政策こそ最も肝要なものであると思ふのであります。それには人類の文化を中心とせねばなりません。勞資の協調も必要であります。人類の爲めの資本であり、社會の爲めの労働であります。

乍然かゝる理想をいかにして私共は實現することでありませう、そこには可なりの反省と深き自覺とを要するのであります。それに對する方策も今全く無いのではありませんが、それは亦他日に譲づることいたします。

(一九三二、二、三)

## 昨今の生活

(三)

安田 恢 順

私は前述の通り、未だ三旬の前に「汝の事業は我がな

す業也」との尊き使命の下に勇まされつゝ立ちたるもの

が、遂に不知不識の中に暴れ狂ふ心の駒の走るに任せ眞生の意義を没却されて有つた悲しき事實である。私は思つた、私が署長さんより頂いたこの惠興の一封のことを、知友に知らしたことのまゝが、一大恐るべき橋慢の鬼と化して居たことに氣付がなかつたのである。さぞや我が亡き母に、僧都の母のように……何んと云ふて怒り召して見へるであらう、あの不動尊の炎のやうに、慈愛は炎と化して、あはれ悲泣の涙にくれますのであらう、あゝ私のこの涙、此の悩み、恐れ、そはその儘亡き母の悩みであり、恐れであり、涙である。赦させ玉へ母上!! 愚かなる私であります。君より與へられし智恵の眼が、暗に盲ひたのであります、只々赦させ玉へ〜と泣いたのであります。その泣く聲はそのまま念佛の聲であつた。何ものとも知れぬ念佛の中に只々泣いたのであります。而も悲泣に悶ゆるこの聲は、心を過去へ〜と送上するのであります。在ませし時の吾が母上!! 吾が父上!! 多くある兄弟の中に末子と生れたこの私を、只だ獨り子のように孤兒救ふ心持ちでか。この私を僧とせられた、その心の切なる凍りにや、父上の今や死に頻せんとする刹那にも、この私の名を呼んで、呼んで呼びつゝも、遂に念佛裡中に死んで往かれた。を、丁度其の時であつた。私は越前の營所に居た、私は父の死を氣づか

あつた。あゝあはれつたなき我がこの心、涙つきせぬ我がこの心、誰れも知るよしなけれ共如来にかくさん術もなし、如来は心の底までも、常恒照して救はんと逃ぐる後足をさへまし悲しみます尊とさよ!!」と思へば思ふ程有難さに涙こぼるゝのであります。

上人よ!! 私はこの二大悲劇場を通過したと云はんか、歡喜法悦の園に遊びしと云はんか、此の尊き關所を通りまして以來、私はこの心の中に悦びの來る時、嬉しい時、悲しい時、悶えるその一切の時、増上慢の起る時、懈怠の心の起る時、瞋る時、笑ふ時、一切に念佛するのであります。その念佛に救はれ助けられ、今日を今日と引立てられて、喜び、勇みに勇んで今日の日を送らして頂いて居るのであります。

### 六、人は我身の鏡

昔から人の振り見て我が振り直せと云ふことがあるが他か彼かとは云ふものゝ、人が悪いとか良いとか云ふものゝ多くはそこに自己も包まれ入つて居るようである。人の善悪は多くの場合、自己中心になつて居る、所謂自分に氣に入るとは、自分の都合のよいように云つてくれとか、行ふてくれるとかすると、彼れは善人ぢや、親切なものぢやと云ひ、之れと反對に自分の都合に悪いこ

ひつゝ畫間と云ふにウト〜とまごろみの中に眠つた。父は私のこの寢所を驚ろかされたのである。「汝僧となる共、普通の世涉り坊主とは成つてくれるなよ、吾が願ぢや! 眞の善知識となつて呉れよ〜」と、操り返し〜枕紙に立つての父の遺言であつた。

その時の光景、心相、形容すべきことは出来ない。そのまゝ今生きまして、尙ほも我が心前に立ちまして、更に〜復讐しますようである、その聲のいかに悲痛なる、「汝あの時なんぞ遺言せしや、あれぞ一心込めし我遺言なるぞ、汝なんぞ眞實に生きて行かないぞ」誠に恐懼の次第であります。尙ほも心の耳は引かれるのである。かの願のみあるも孤であり、行のみあるも孤であり願行具足が眞の道であるものを、願のみに、行のみに執着する勿れ、執着は解脱への首カセである。汝の歩むべき道は、眞生への道である。精神的方面を間違へるな! 心ゆるがせにすれば、過去習慣性たる、汝の橋慢の惡魔は時を得すぎ間を見て亂入するぞ、堅固なれ精進なれ! ささも怒れるが如く、さとすが如く、訴ふるが様であり頼まれるが様であつた。

あゝ吾この心と心とに、心の底へ奥へと準々としてしみ込んで來るのであります。「吾れ知れと靜かに照らす夏の月雲間をぬゐて吾が胸に入る」とはその時の感想でとでも云へば、直ぐに腹を立てる、瞋る、恨む、ねたむの心となり、其人に對して惡口が云ひたくなる、而も之れらは皆自己の都合より割出したもので、先方の善惡の如何を顧慮するのではない、即ち自己本意から正邪批判をなすものである、眞の批判は自己が鏡のように無我になり、一切を宿し、一切を寫す處に、そこに他の赤白そのまゝが寫るのである。私は人の善惡正邪等は佛を中心として一切を判別したい。佛は眞であり、善であり、美である、大宇宙に遍滿して變ることなく、一切の中に入て中核となり、一切を向上せしめ、進化せしめ給ふ。眞に如是相にして如是作である。此の眞實相の生命と目的とを誤まらないものを善と云ひ、之れに反するものを惡と云ひ邪と云ひたい、嚴密なる意味を以て云へば、鏡の上に寫れるものゝ如き、吾等の一切の經驗は空であり無である、そして虚假である、眞實ではない。それ不眞實の虚假なるものを以て眞の自己であり、我であるとして居る所が凡夫である。

この我れなるものは單なる過去經驗の遺物に過ぎないのである、我の過去遺物を以て我れ也とする處に他の多くの人々の場合に於てもそれを見ることが出来る、こゝに人は我身の鏡と云ふような意味となりはせないかと思ふ。もつと深く思惟する時は佛を離れ、一切のこと、善



惡正邪も醜美曲直等皆悉く惡と云ひたいのである。只一言善は只佛の所應作之れのみである。所謂佛まかせの身こそ安けれ、この境を極樂界と云ひ、其人を指して往生人と云ふのである。換言すれば佛に向つて、日々に新しく自己を改良し進化して行く、その人をして善人と云ひ得るのである。經の「善人は善を行じて、明より明に樂より樂に入る」とあるのは之れである。この人の中心より出ずる精進の相こそ、眞に我身の鏡と云ひ得べく、又我々その人を見て拜むのである。乍し人は多くの場合この虚假の我を以て、凡てを批判するから面白いのである。只口を開いて笑ふ外ないのみである。それと同様に今日の私の上にある凡てを人は見て何んと云ひて居るかを聞いて貰ひたい、そこに面白い處があります。

或る人は私の住宅を見て、あんなブタ小屋のような中に居て、満足そうに暮らして居る、チト氣でも變になつたのではないかとか、或は單にオキギの國の家のようだと云ふ、或人は皮肉にも「こんな處に家が出来た、中に鶏でも居るかと思つたら日焼け顔頭留見たような奴が居る」と話しつゝ行く。或は汝のように足の不自由であるのに、泥仕事のような事なんか爲ぬでもよいではないか、一層止めたら何うであると云ふ、そこで止めて何うすると云へば、遊んで樂をして居れと云ふ、之れ等は忌

そんなことなら念佛を申すことなんか止めたら何うだと思ふこともある。

又こんな生活を耳新らしそうに思つて、二里も三里も遠くからわざわざ見に来る人もある。又一方にはさぞかし美くしい心でやつて居ようから、その眞實心中を聞かぬものをと尋ねてくれるものもある、等々何々なき人眺めるように、千差萬別に批判を下して行く、而し乍らこれ等の思ひの批判を聞いて居ると面白い氣分もするが、又尊いように拜したくなるものもある。それと共に私下すことがある。誠に思ふがまゝに言ふなれば、一事のことも數千萬言を要することを知らないのである。故なる哉、一事一物、そこには大宇宙の全体が含まれて居ることに氣付かされる。現に私はこの一小身、こゝに心で見るときは一切が淨らかであり、垢穢ニゴリの心で一切を見る時は、又一切が濁つて見へるものだ。一切唯心に眞に死んで居る。佛の有無も知らずに、佛に背むいしり人をねたみ、人を恨みて罪のみ造る、これ等の罪惡

け遊びを以て樂と思ふて居るのである。私は遊ぶ程、怠ける程、苦しいことはないのを、やつぱり私の心を知らぬ、又一人の如きは隠居をし乍らまだ強慾な奴ぢや、自身に難儀し乍ら田地なんかを作つて居る慾深者であると云ふ、中には社會事業をして町のためにするとか、又事は小さいがあれが眞に國家の爲めになる行ひであると褒める者もあると思へば、又一方には金錢自立のことも考へず無みやたらな盲目的のことをする、自分獨りよければ妻なんか捨て、置いてよいものか、眞の生活はそんなものではない。何んぞ誤れることの甚だしいもの程があると惡口するのもある。又面白いのは脱疽病をするような者は常に脱線したこと計りやるものであると、天理教の御さとしてもするように云ふものがある、或はあれ程今迄に青少年の誘導に、人心向上のことに骨折つたものが、あんな我慢なことをする、人も變れば變るもの哉と嘆ずるものもある、それかと云ふて、彼れは生活機能を忘れて、佛任せと氣張つて居る、譯不知の馬鹿者であるとか、又一方には親切そうに、汝はたつた一人でさぞ淋しからう、お氣の毒様であると云ふから、私は佛と一所だから何も寂しくはないと答へると、それでもと云ふから、お前さんは手に球數かけてお寺へ參るが死んで極樂へ行くと、佛様計りだから淋しくてたまるまい、一層

生死の凡夫もあるかと思へば、不輕菩薩のように、人の善、佛種の尊とさのみを見て、有難く尊く拜し合ひをして美わしい生活をして居る信者も居る。

兎に角一切を見る時、眞に生き活きんとして、中心精進の相が各自の心中に満ち満ちて居る、その處が有難い。只それ等の目的、それ等の行動を異にする處より、一方を聖者と云ひ、一方を凡夫人と呼はれるのである。それと共に、其の聖なる行動を見る時、そこに何んとも言ひ知れぬなつかしさと喜びとを感ずるのである。善なる思ひ内にあれ共、いざ實行と云ふ時、多くは退き勝ちであるものを、聖なる哉、聖者は之れを實行する。そこに宗教の力強きを思はれそこに御佛の力の偉大さを念ぜずには居られない。お、御佛!! 御佛は眞に大圓鏡にして、而も一切を平等に、善きに撫育します、そのことのいと尊ふとさよ、兎に角彼此我ともに善惡の票本である。鏡と鏡と相ひ映する時、そこに眞實の美があり善がある。又一方に虚假と虚假と相寄り、相集まる時、雜色雜物世は暗翳たる争鬪の悶えが生れるのである。只願くは我がこのタドン玉に如來の清き火こそ移れよと念する外ないのである。そして一步一步を、全身全眞を込めて精進努力をするのである。これぞ無畏であり眞の自由である。

御佛の光りの中に暮らす身は

たゝ生き活きと意氣で働く

この槌は實振り出す槌ならで

なまくらものゝ頭はる槌

御上人様!! こんな愚にもつかぬことを、永々と書き

まして、讀んで頂くだけでも一時間も費へるかと思ふこ

誠に御上人の急かはしき、而も尊き時間を消費したこと

の罪を謝するのであります。而し乍らこれも自身の子等

の一人が愚痴を並べしことと思召し下され、幾重にもお

詫言申上げます。一度は〱思ひあるだけ酒け出し、悶

える心に満足を與へたいと思ふたのであります。願くは

怒れみを垂れ、佛種精進の途を御指導あらん事を、合掌

乍未筆、奥様へ私は上述の様なことを、無事で壯健で

やつて居りますから御放配あらんことを、宜敷しく御鶴

聲下され度願ひます。

南無阿彌陀佛。

(十一月十九日)

### 吾朋便り

□東京 土屋觀道

各地とも風邪が流行してゐるやうです

が、皆様には御變りもありませんか御案

じ申してゐます。私の方でも殆ど一通り

それにかゝりました、幸にも輕くてす

みさうです。それに二月の十二日にはか

れて御心配かけてゐた子供が生まれまして

母子共に無事ですから乍他事御休神のほ

どを御願ひ申します。

□男の子であれかしゝ實はひそかに念じ

居りましたが生れて来たのは女の子で

した。それでも生れて見ればやつぱり可

愛いものです。殊に生れて来てくれた子

供に對して今更ら男の子であればよかつ

たなごゝも云へないやうな氣がしまつて

一家は歡びの中に充たされて居ります。

□男の子が一人しか居ないので、今一人

位男の子があつても望んでゐた矢先き

ですから女の子が生れたのは一寸裏切ら

れたやうな心もしました。が今ではその氣

もありません。或る道友の方に女でも無

事に生れたので喜んでゐますと云つてや

つたのを、でもと云ふのが氣にくはぬ、

女でもなき云はれるこゝ、之でも女なくし

て人間が有りうるか、あなたも女のおか

げで生れて来たのではありませんか云

つてやりたくありませんよ、女に肩もつ

て頂くので、一家も安心してゐます、女

の子萬々歳であります。

□生れた子には色々考へた末、千枝子

と命名しました。如來の御子として末永

く榮えよとの親の心であります。幸に日

立ちもよいやうです。

□それにつけても、もう私も四人の人の

親となりまして。歳も四十五才でありま

す。靜に人生を考ゆれば此の世ほご不思

議にも亦有難いものはありません。私の  
小さい時、私には此の世の中が非常に恐  
ろしく思はれてなりません。それ  
は此の世に對する經驗がない爲めに、此  
の世に於ける人生の不安であります。そ  
こには生活難や職業難もありました。

□まして、人の夫となつたり、親となる  
やうなことが私にあるだらうかと思へ一  
つの疑問であつたことさへ永い間であつ  
たのであります。

□然にそれが今は妻あり子ある身となり  
まして、已に四人の子供の親となつた  
のであります。親に仕へた子の心とし  
ての私は今や子を思ふ親の心としての私  
を知る身となつたのであります。

□見やうによつてはこんなことは人間と  
してはあたりまへの事であつて、別段何  
でもないことだと思ふ人もあるかも知れ  
ませんが、乍然之でも本當に人生を深く  
考へて、自分の行く末を永久に思ふとき  
私には限りなき人生の何ものかを與えら  
るゝ感じがしてなりません。

□私を中心として生れた子供が之から段  
々成長して學校にも行き、又社會にも

立つて、更に一家を構ふる時がありませ  
うが、如來を中心とする人類の自覺が今  
私共を動かしてゐるやうに、之等の子供  
の一家にも動いて來ることを思ふとき、  
未だ生れて幾日もならない此の子供では  
ありませんが、何だか大きな使命を以つて

此の世に來たかのやうな感じもします。  
□人生僅に五十年と云へば私の壽命もあ  
る五年しか無いわけであるが、限りなき  
如來の御光りに照された生活から見れば  
かうして如來を中心とする一家の生活が  
私の家に生れて來る子供の前途にも大き  
な幸が漲つてゐるやうにも思はれます。

□乍然之はたゞ私一人の心もちを述べた  
のではありません、等しく、人として此  
の世に生れ日夜に成長して妻となり夫と  
なり、さては人の子の親として、此の世  
に生る人々の心をも味つて見たのであり  
ます。

□次に二月はあまり申すこともありませ  
ん。殊に各地に一つも出なかつたもので  
すから、道友の動靜もあまり判つきりせ  
ぬのであります。二月四日の學寮の集り  
の後には次の二十日が都築氏の御宅での

集りでありました。近頃の都築氏一家の  
御熱心には全く敬服いたして居ります。  
道友の集りは僅に二十人ばかりでありま  
したが割合に新顔も多くて非常に賑ひま  
した。

□次に道友の方々に喜んで頂きたいこと  
は昨年末から清水の中村(弁慶)上人が  
淨土宗の教學部長として赴任上京せられ  
たことです。上人が信仰の人であること  
はもとよりであります。我が道友の中か  
らかゝる榮耀に立たれたことは非常に喜  
ばしいことであり、きつと宗門教  
學の上にも新しい功績がいたされること  
と喜んで居ります。

□尙越後の原吉郎氏も目下議會の開會中  
のことで御上京中であり、私  
としては度々御目にかゝることまできて  
一層の喜びであります。中には之を期會  
に中村上人や原様を中心として東京在住  
のもので歡迎會でも開いて大いに語らう  
ではないかと云ふ話を持ちあがつて居り  
ます。

□尙坂阜の方から道友坂井範一氏が繪畫  
勉學の爲め一家引越して御出になりまし

たのこ同古賀清一郎氏が目下御上京中であります。

〔又此の程中、伊勢、大阪、和歌山、名古屋、岡崎等の方面に傳道中の神谷善之進氏が歸京せられました。今度新に二三ヶ所の新たな道友の集會ができた。うだが各地とも非常の盛會であつた由承

つて喜んで居ります。  
 〔私の三月は六日から越後へ出發、それから和歌山、神戸、大阪、尼ヶ崎、若屋、津、名古屋、岐阜、焼津方面を経て二十六七日程歸京の豫定であります。幸に各地道友の御奮勵を願います。(一九三一、二、二七)

### 行基寺別時三昧會案内

時 四月十四日午前五時開白 四月二十日閉會

所 岐阜縣海津郡城山村 行基寺

(養老編美濃山崎驛下車約五丁)

導師 土屋 觀道 師

○土屋上人は十三日夕方御着です。

○場所は八里離れた仙境。外には櫻花爛漫の眺め。内には念佛三昧の妙諦。ごうそ皆様御誘ひ合せ御隨喜下さい。

主 催 行 基 寺

誌 代 拂 込 御 芳 名

一金拾圓 名古屋安藤康次郎様、一金壹圓宛 名古屋中川五十子様、同基  
 本久子様

(大正十四年八月十三日) 昭和六年三月十日印刷納本 (毎月一回十二日發行) 第十卷第三號

本誌定價  
 一部 金十錢 郵稅共  
 半年 金六十錢 全  
 一年 金一圓 全

注 文 の 意  
 講讀希望者は代金を添へて御申込下さい  
 誌代は總て前金御拂込の事  
 送金は振替によるのが便利  
 です

昭和六年三月十日印刷納本  
 昭和六年三月十二日發行

東京市芝區芝公園十四號地九番

發行兼 編輯人 土屋 觀道

名古屋市西區隅田町二一番地 印刷人 百々治之助

名古屋市中區鶴屋町二丁目 印刷所 藤田山田活版印刷所

電話西(5)二九三番 電話東(4)三六・五五

東京市芝區芝公園十四號地九番

發行所 眞生社

振替口座東京四七二八八番